

Akatsuka, I. (ed.): *Biology of economic algae*. 545pp.
1994. SPB Academic Publishing bv P. O. Box 97747
2509 GC The Hague The Netherlands.

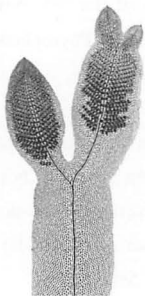
いきなり私事で恐縮ですが、かつて学会主催の旅行でデンマークの寒天工場を訪ねた時、同国の原藻は既に枯渇し、東南アジアからの別種の原藻に頼っているのを見た。日本でも同様のことが起っていたので、改めて地球規模での経済性の高い藻類やその資源がどうなっているか気になったことがあつた。本書はこのような疑問に答えてくれるほか、いろいろな知識をみたくしてくれる格好の文献である。編者の赤塚伊三武氏は最近、藻類の利用状況を紹介した *Introduction to Applied Phycology* (1990) を刊行したが、それに続いた有用藻類総説集の第2弾であり、正にタイムリーな企画と言える。今回は有用藻類の生物学という標題であるが、紅藻と褐藻の大形海藻類16分類群を対象としている。編者はひきつづいて微細藻類も含めたこれ以外の有用種についての続刊も準備しているとのことである。内容は二つのパートに分かれ、最初のパートは紅藻類のオゴノリ科、イギス科、エゴノリ属、ツノマタ属、アカバ属、*Diisea* 属、シマテングサ属、オキツノリ属、イバラノリ属、オバクサ属、*Suhria* 属及びスサケベニ科の1種 *Furcellaria lubricalis* について、そしてパート2では褐藻類のカジメ属、*Durvillaea* 属、*Lessonia* 属、*Macrocystis* 属からなり、総頁数は545頁である。藻類によっては過去の研究業績が貧弱で頁数が少ないものもあるが、大体30~50頁にわたって要約

書評 新刊 紹介



されている。しかし、パート2の *Macrocystis* 属では1985年頃までの文献について既に4つのレビューがあるので、ここでは1980年以降のものが中心になっている。それにしても81頁にもおよび、この海藻の研究活動の盛んなことがうかがわれる。本書で取り上げている海藻のほとんどは、現在積極的に食用や含有物質が用いられ経済性の高い資源であるが、中には将来の利用も考えられる海藻も含まれている。執筆者は共著者も含めて21人で、原藻の産地を含めて11ヶ国の大学や研究所で活躍しているそれぞれの分類群の専門家たちで、編者がこれらの陣容を揃えたことが本書の高い評価につながることを望む次第である。次回はわが国からの参加も期待したい。各章では分類、形態、生殖、生活史、分布、生態、利用が殆ど共通した項目で遺伝、生理学、病理学、含有物質、増養殖、生物統計学、資源、経済性など多岐にわたっている。これらの項目は多くの場合更に細分されているが、番号を付して整理し、読み易くなっている。しかし、著者によっては同じ意味でも表現が異なる場合があることを留意すべきである。本書は産業種の生物学の総説であるので、応用方面にも紙面を割いているのが特徴とも言える。いずれにしても有用海藻の知識を良くまとめてあるので、特に水産系の大学院生は勿論、大学や試験研究機関におすすぬしたい。現在価格は未定である。

(〒226 横浜市緑区東本郷 6-27-2-306 正置富太郎)



表紙写真

広塩性紅藻 *Caloglossa leprieurii* (Montagne) Agardh (イギス目、コノハノリ科) の培養藻体。かけあわせの結果生じた四分胞子体が成熟し、たくさんの四分胞子を形成している。

提供 神谷充伸 (筑波大・生物)